

# 平成 25 年度 事 業 報 告 書

 公益財団法人佐々木研究所

## 公益財団法人佐々木研究所 平成25年度事業報告書

### I. 平成25年度の主要な活動状況報告

#### 総括

平成25年度は、公益財団法人移行後2年目に当たるが、平成24年度に引き続き、創業の理念と伝統を生かした医学研究財団としての活動を行った。

明治15年(1882年)に佐々木東洋が杏雲堂病院創立時に掲げた「医学の進歩に寄与し、医業を以って社会に貢献する」という理念の下にそれ以来長きに亘り、研究と医療の一体化を実践してきた。2代目院長の佐々木政吉は明治27年(1894年)私邸に研究所を建設し今日の研究所の基礎を築いた。3代目院長の佐々木隆興は研究所を財団法人化し、杏雲堂病院をその附属病院として公益的な組織とした。これにより研究・医療機関としての確固たる経営基盤が確立された。

現在、附属佐々木研究所、附属杏雲堂病院および附属湘南健診センターの3事業所において、公益目的に沿い臨床と一体となった研究活動を行っている。

一方、中長期の視点に立って、公益目的事業推進のため以下の諸施策を実行した。主な施策としては、平成25年12月に、学校法人順天堂との間で、研究連携及び医療連携に関わる協定書調印を行い、共同研究の推進体制整備および従来にも増して患者の相互紹介、医師等の交流の取組みを開始した。また、平成25年度後半に将来構想検討委員会を立ち上げ、平成29年度に向けた将来構想ならびに中期経営計画を平成25年12月に確定させ、法人全体の経営改善計画をスタートさせた。平成26年度も引き続き同計画を遂行してゆく。

#### 1. 各事業所の概況

(1) 附属研究所では、所長の他、年度末時点では、専任研究員、研究助手、研究補助員、及び客員研究員ら9名が実験を伴う研究に従事した。他に杏雲堂病院および湘南健診センターの医師および医療従事者が兼任研究員として臨床研究を行っており、研究活動も活発化してきた。また、研究費に関しては、計3件の科学研究費を外部からの研究資金として獲得した。

さらには、平成25年7月「臨床研究発表会」を2日間に亘り開催し、15研究課題(平成24年度も15件)の成果発表と討議があった。その他、本年度は学術誌に22編の論文(英文13、和文9)が発表した。学会発表、講演及び講義としては57件(国際学会発表15、国内学会発表37、研究会・講演会5)が行われた。さらに、外部に対する啓蒙としての総説7編が出版された。

また、研究用機器類の取得を継続的に進めるとともに、学校法人順天堂を中心とした研究連携を視野に入れて実験室等の整備を開始した。研究環境も次第に整備され、

研究活動も軌道に乗り始めている。

- (2) 附属杏雲堂病院に於いては総院長・院長制をスタートして、「神田駿河台で 130 年、地域とともに杏雲堂病院」「このがんなら杏雲堂病院で」をキャッチフレーズとし、順天堂医院、地域医療機関等との連携強化を図った。

業況面でみると、一部医師の退職、頭頸部外科の廃止、病棟改修工事のための入院病棟の一時閉鎖等のマイナス要因があったが、他の診療科によりカバーして、入院・外来患者数は約 2%の小幅減少にとどまった。引き続き収支均衡に向けた患者数増加・収入拡大の諸施策を展開する。その他収益も含めた経常収益は 3,434 百万円で、予算比 46 百万円の増加、平成 24 年度比 142 百万円の増加であったが、予算外の約 2 億円の大口寄付金収入が増加理由である。一方、院内整備を実施して、院内改装並びに MRI 導入を始めとする医療設備の充実を図り、患者相談窓口の充実あるいは各種委員会の整備等を通じて、病院機能の充実を図った。また、臨床研究推進のための人材確保と研究所との連携強化にも努めた。

- (3) 附属湘南健診センターは、経常収益 307 百万円と平成 24 年度に引き続き 3 億円を超え、年間受診者数も 1 万 3 千人を超えた。ともに過去最高を記録した。また、内視鏡検査総数は 1,260 件を超え、高精細新機種経鼻内視鏡の施行数も、初めて 1,000 件を超え、受診者からも好評である。

- (4) 収益事業である杏雲ビルは、近隣に新規大型ビルが完成したこと等による競争の激化を見込んだが、利便性等に関しての競争力があり、入居率が高止まりして、対平成 24 年度比較での賃料収入の減少は小幅であった。収益事業の経常収益は 1,231 百万円となり予算比 67 百万円の増加、平成 24 年度比 37 百万円の減少となった。

- (5) 財団全体の経常収益合計は大口の寄付金収入 203 百万円が貢献して 4,988 百万円となり、予算比 133 百万円の増収、平成 24 年度比では 107 百万円の増収であった。一般・指定正味財産増減額（利益額）は上記の寄付金および固定資産税の過年度還付金 524 百万円の経常外収益という特殊要因が重なり、788 百万円と大幅な増益となった。予算比では 766 百万円の増加、平成 24 年度比では 740 百万円の増加となり、増収・増益の決算となった。尚、中期経営計画ならびに事業計画に掲げたように、引き続き収支改善は今後の大きな課題であり、平成 26 年度以降も改善に努めて行く。

## 2. その他の活動について

### (1) 建物保全計画

懸案となっていた杏雲堂病院各階の病棟の内装（床、壁、照明）及び備品等の更新を行い、入院患者等から好評を得ている。また幹部・医師居室あるいは会議室等であった病院 9 階についても、全面改装に着手した。更に、建物・設備自体の経年化対策としては、杏雲ビル、研究所棟、病院に関して、空調、給水等の補強工事や検査を実施した。

杏雲ビルについては、共有部分の内装のリニューアル工事を行った。

(2) 大規模地震防災対策及びBCP計画

建物非構造部分及び設備の防災・減災計画の調査、備品等の転倒防止対策調査を実施した。また食料、飲料、医薬品及び物品等の備蓄倉庫を地下2階に設置し受け入れ準備を整えた。備蓄品の購入は平成26年度となる。

(3) 病院機能評価

受審準備を開始し、病院内の機能見直しと改善活動を実施した。

(4) 人事・処遇制度改善

目標管理制度の見直し（平成26年度開始予定）や年俸制の整備、定年再雇用制度の導入・整備等の一連の制度改善を行った。平成26年度も、引き続き、制度導入や改善を実施して行く予定である。

(5) 役員構成

平成25年度末現在、理事14名、監事2名、評議員11名の体制であった。財団経営に関する会議としては、定例理事会4回、臨時理事会2回、評議員会2回、臨時評議員会1回及び経営会議を20回開催した。

## II. 研究事業活動

### 1. 研究事業概要

(1) 職員

研究者要員としては、附属研究所において、所長の他、研究所専任研究員4名（常勤研究員2名、非常勤研究員2名）、研究助手1名、研究補助員3名（うち1名は研究事務担当非常勤）、客員研究員1名が研究に従事した。また、附属病院においては、常勤医師、看護師、その他の医療従事者の27名（部長6名、主任研究員12名、研究員9名）が研究所兼任研究者として研究に従事した。

(2) 概要

公益財団法人佐々木研究所は、「患者に役立つ研究とその支援を行い、医学・医療の進歩に寄与する」ことを理念とし、「がんその他の疾患の予防・診断・治療の研究開発を行い、医学の進歩ならびに人材の育成を図り、より良い医療の推進、普及に努め、以って国民の健康増進に寄与することを目的とする」と定款に定め、平成24年度から附属佐々木研究所、附属杏雲堂病院、附属湘南健診センターを研究実施施設とする研究機関として、「医学研究を通じて国民の健康増進に寄与する」公益目的事業を行うことを新たなミッションとして研究事業を進めている。

創設以来の佐々木隆興博士、吉田富三博士による医学研究の伝統を堅持し、患者が求める医療に応える臨床に根差した研究を行う。患者にとって必要な医療を医学研究課題

として把握できるのは、医療の現場で診療にあたるリサーチマインドを持つ、医師、看護師、その他の医療従事者である。臨床の場でひらめいたことを医学研究課題として設定し、附属研究所における実験を基盤とする基礎的解析、ならびに附属病院における臨床的解析により、答えを出し患者に還元することが、行うべき公益目的事業である。

研究体制としては、附属研究所に、腫瘍ゲノム学系、内科系、外科系、予防医学系、看護学系、診療支援系、がん情報管理系の7臨床研究部門を置き、専任研究員並びに兼任研究員を構成要員として配置して、がんをはじめとする疾病に関する研究を活発に遂行する。全ての部門に臨床と付したが、基礎研究、臨床研究と区別するのは本意ではない。医学に携わる者はいずれも疾病の克服を目指す科学者、医学研究者である。平成24年度、内科系と外科系臨床研究部門に、研究所専任の研究者を構成員とする実験を基盤とする複数の研究チームを新たに立ち上げた。平成25年度は、これら実験研究チームの活動の充実を図り、研究課題の達成に尽力した。また、平成25年度も、附属病院に勤務する、常勤医師全員、看護師、その他の医療従事者が研究所研究員を兼任し、実験を伴わない従来型の臨床研究を継続した。常時、研究課題について考え、診療の場における貴重な観察、患者試料の採取、収集と解析、患者臨床情報の蓄積など、活発な研究活動を展開した

研究支援体制としては、老朽配管への対応など実験施設として必要な修理、整備を行った。研究機器に関しては、必須機器類の新規購入、既存機器の修理、保守点検管理を行い、スムーズな研究遂行を心がけた。実験室に関しては、特に、都心に位置する研究所としてのバイオセーフティーへの配慮の観点から、研究所2階のP1レベル実験室3室、P2レベル実験室1室を、遺伝子組換え生物の使用における種の多様性確保、生体材料を用いた実験におけるバイオセーフティーに対応する実験管理区域として、適切に管理するとともに整備を進め、研究推進を行った。実験に伴い生じた廃棄物に関しては、産業廃棄物として処理すべきルールを作成、遵守し、専門業者との契約の上、適切なシステムでの廃棄を遂行した。研究試料の保存、管理に関しては、研究所地下2階に設けたフリーザー室に、複数ディープフリーザーを集め、貴重な患者試料である臨床検体、種々の研究材料等の安全な管理、保管を遂行した。ソフト面に関しては、生物多様性の確保、知財管理等への対応、研究支援並びに研究所運営に関する各種の取り決めの充実を図りながら研究事業を進めた。

研究費に関しては、年度予算の事業活動費を基盤に研究推進を行った。さらなる研究活動発展のための研究費として、科学研究費助成事業等への応募を行い、学術研究助成基金助成金の基盤研究(C)1件、若手研究(B)2件、を外部資金として獲得した。また、寄付金の獲得を推進した。

将来構想として、平成26年度以降「がんとの共存を目指す」研究を進めて行くことを提案し、学校法人順天堂との研究連携協定に基づき、動物実験施設を整備、利用することによる共同研究を推進していくこととした。

### (3) 研究計画達成状況

#### 1) がんその他の疾患に関する研究事業

疾患の理解、診断、治療に資する知見を得るための研究として、関節リウマチ、膠原病、糖尿病、がん一般、卵巣がん、子宮頸部がんなどを対象とする課題に取り組んだ。関節リウマチに関しては、サイトカイン **IL-35** が患者の症状に及ぼす影響を T 細胞増殖抑制との関連において解析し、**IL-35** が抑制性サイトカインとして治療に応用できる可能性を示した。また、患者における、抗体製剤、受容体製剤など各種サイトカインに反応する生物学的製剤の効果を予測する因子として、治療反応群と非反応群で変動を呈する血清中 **Hepcidin-25** などを見出した。膠原病に関しては、患者に多く見られる微小循環障害に焦点を当て、血管内皮の新生と機能、炎症との関連につき多角的検討を行い、抗内皮細胞抗体としてエンドセリン受容体 B サブタイプに対する抗体の可能性を示した。糖尿病に関しては、膵島の高次細胞凝集塊としての微小環境の重要性に着目し、各膵島構成細胞、特に血糖調節に重要な  $\alpha$  細胞及び  $\beta$  細胞におけるシグナルネットワークについて 3 次元培養細胞系を用いて解析する。グルコース刺激によるインスリン分泌能やストレス応答性の観点からの  $\beta$  細胞株の選定、膵島様高次構造形成のための細胞培養の最適化、蛍光タンパク質標識による細胞起源の追跡が可能かつ、**tet-on** システム搭載型のレトロウイルス発現ベクターの構築などを行った。現在までのところ、適切な培養条件を用いることで、グルコース刺激性インスリン分泌やストレス脆弱性に関して、生体内により近い生理応答を示す細胞株の同定に成功した。

がんに関しては、DNA メチル化異常の実態解明を主眼におき、必要なメチル化 DNA の単離技術の開発を目的に、熱耐性酵素検索のための DNA 基質の作成を行った。糖尿病患者における発がんリスクが、DNA メチル化の変化である可能性を追求し、得られた情報をリスク事前予測法の開発に結び付ける。また、がんとの関連において、糖尿病薬によるがん細胞増殖促進効果の解析を行う。消化器がんに関して、術前免疫能と外科領域術後感染症の関連性を検討するため、患者血液試料の採取を進めた。婦人科がんの新しい診断・治療法開発のため、卵巣がんに関しては、臨床病理学的検討によって結合組織成長因子 (CTGF) が、抗がん剤の感受性に関与している可能性を見出している。卵巣がん細胞株の解析により、パクリタキセル感受性と CTGF の発現が相関している可能性があったが、卵巣明細胞腺がん細胞株 **OVISE** にて、パクリタキセル感受性と CTGF 発現との関連を検討した結果、CTGF siRNA 投与群で Control siRNA 投与群に比べ、若干パクリタキセルの感受性が低い傾向は示したが、大きな相関は見出されなかった。一方、卵巣がん以外のがんで CTGF の働きを臨床病理学的に検討したところ、頭頸部扁平上皮がんでは、卵巣がんと異なり化学療法への感受性を低くして、生命予後を悪化させている可能性が示唆された。情報伝達系において、CTGF の下流で機能し、治療薬開発の標的となる分子を、2 次元電気泳動法を用いて探索する準備を進めた。子宮

頸部がんに関しては、光線力学的療法の作用機序として、腫瘍親和性光感受性物質とレーザー光線との光化学反応で産生される活性酸素による細胞死と考えられ、その詳細説明を目的としているが、低酸素下でも光感受性物質レザフィリンの暴露濃度を上げることで正常酸素分圧下と同様に殺細胞効果を持つことができる可能性を示唆する結果を得た。

## 2) 患者の生活の質の維持・向上に資する治療法の研究事業

関節リウマチに関して、生物学的製剤の薬効の臨床評価と長期安全性を検討し、投与量の変更や投与間隔の短縮、他剤への切り替え等が必要な症例を見出した。また、関節リウマチ合併骨粗鬆症患者および膠原病患者におけるステロイド性骨粗鬆症に対する活性型ビタミンD3製剤エルデカルシトールの治療効果の検討を行うため、患者登録を継続実施した。肝細胞がん患者に関して、肝外転移したがん腫に対する無痛ラジオ波焼灼療法の有用性を検討し、放射線治療や全身化学療法を回避できる可能性を示唆した。ソナゾイド造影超音波による肝細胞がん骨転移の診断と治療効果判定の向上を目的に、症例の登録と検査を施行し、腫瘍残存を超音波で評価できる可能性を示した。根治後のHCVウイルス感染肝細胞がんの再発および生存に関するインターフェロン療法の有用性の検討を行い、有用性を示唆する結果を得た。難治性腹水に対する腹水濃縮還流療法(CART)を7例について施行し、1例で腹水の消失を認め、データの集積を続行している。進行胆膵がんに対する動注療法の有効性を検討する予定であったが、新規患者の登録がなく継続することとした。子宮頸部がんの光線力学的療法において、光過敏症軽減、入院期間短縮を目指した第2世代光線力学的療法の開発、また、外来治療を目指した第3世代光線力学的療法の開発を継続した。直接的レニン阻害薬ラジレスが、深部静脈血栓症浮腫に対して効果を示すことを見出しその有用性を確認した。肺がんに対しての無痛ラジオ波焼灼療法の有用性に関しては、臨床使用確認試験がほぼ終了した。びまん性肺疾患に対するCTガイド下内視鏡有用性の検討を継続中であるが、合併症としての医原性気胸は見出されず、有用である可能性が高い。これらの検討、開発は、患者の生活の質の維持・向上に資する治療法の確立に資すると考える。

手根管症候群に対する手外科手術機材の開発の一環として、試作機を3Dプリンターで作成中である。腱鞘切開専用メスの改良で、1年間に100例以上の治療を行い全例で良好な成績が得られ、最少最侵襲の術式と考えられた。これらの技術開発は、整形外科患者の生活の質の維持・向上に貢献する。抗がん剤による睫毛脱毛に関し、患者の美容における質の維持という形成外科的観点から、細胞周期との関係を解析した結果、初期からのラティース投与は副作用のほうが強いと考えられてきたが、成長期にある睫毛は逆にビマトプロストを塗布することで、抗がん剤の影響をうけないことが確認された。さらに休止期にある睫毛毛球は刺激されると推測され、ラティース投与時期は初期もしくは抗がん剤治療後1か月がベストであり、抗がん剤経過中に投与してもほとんど効果

がないことが明らかになった。シスプラチンの腎毒性と、ハイドレーションの効果に関する検討のため、症例集積を継続した。消化管術前検査での腹部CT血管造影法の3次元プロトコルの検討を行い、既存の装置での最適なプロトコル設定の検証ができた。これらの結果は、患者の負担軽減に役立つと考える。

### 3) がんその他の疾患に関する予防医学的研究事業

男性と女性の心電図における違いの解析を、約1,000人に対して行い、その特徴を理解することで心電図の読みに役立てることができることを示した。Acoustic Structure Quantification (ASQ)法を用いた腹部超音波検査で、血液検査や生活習慣との関係、腫瘍の場合は病理学的な性質との関連等を非侵襲的に評価することを目的に、200~300人の画像を解析した結果、有意差の認められる因子を見出し、膵臓においては慢性膵炎の病態解明の一助となる可能などが示唆された。進行および転移性大腸がんに対する集学的治療の意義の検討、術前免疫能と外科領域術後感染症の関連性の解明などを介して、関連疾患の予防に資する情報を明らかにするため、患者試料の集積を進めた。子宮頸部がん検診における細胞診の精度向上と各種HPV検査の臨床評価に関する検討し、PCR検査用自動測定装置Cobas4800システムが、従来の13種類のジェノタイプのハイリスク型HPV核酸検出に加え、より悪性度の高いHPV16型と18型の個別同定が可能であり、子宮頸がんの早期発見、早期治療において臨床的に意義があることを確認した。無症候性胆石の長期追跡調査を継続し、集積症例数が300弱に達したが、把握できた症例の中に有症状化や手術例は認められず、違うtypeに変化した例も特に認めなかった。患者用末梢神経障害質問票を使用して、末梢神経障害の程度や日常の動作の支障は何かを具体的に知ることで、看護師、医師、薬剤師が共通の指標を持ち同じ認識で、患者にタイムリーに関わることができ、がん化学療法が安全に施行されることに繋がることを示唆された。手指衛生遵守に向けた活動を遂行し、その評価と検討を行った結果、手指消毒剤使用量の増加など効果が確認された。中規模病院における感染対策チーム活動の実際把握、手術部位感染監視の実施を行い、サーベイランスの結果を職員全員と共有することは、感染対策に取り組むための強い動機づけとなり、感染率低減のための行動変容に結びつく事が期待された。動脈硬化の指標である血圧脈波の値と、血中脂質濃度および血糖値との関係を解明するため、検診に血圧脈波検査を取り入れることの有用性について検討するため、検診受診者データの蓄積を行った。これらの研究成果は、予防医学への示唆を与えるものと考えられる。

### 4) 臨床研究者の育成を図る事業

各種疾患の病因、病態の理解、診断、治療等に関する分子レベルでの最新情報を、その領域における専門家による講演、セミナー等を開催することにより、臨床研究者に伝え、そのリサーチマインドの育成に役立てることを今後押し進める。研究所での実験を



伴う研究において、兼任研究員の積極的な参加、医系大学院等の学生、研究者の受入れを行うことを念頭に、研究所専任研究員による活発な研究活動の推進を行った。実験研究推進の結果、若手研究者の受入れが可能になれば、臨床医学研究への興味を喚起し、より深い医学研究を目指す動機付けとなるとともに、研究所としての研究活動の活発化、次世代の研究者の育成に寄与できるものと考えている。

## 2. 研究の公表

研究成果の公表に関しては、知的財産権に関する配慮の上、随時、論文発表、学会発表で公表した。また、各臨床研究部門において平成 24 年度事業計画書に記載の研究課題に取り組んだ各研究成果を、広く研究者の間で分かち合い、また、理事、評議員に報告するため、平成 25 年 7 月、2 日間にわたって「臨床研究発表会」を開催した。秘密保持誓約書に記述の内容に合意の上、多数の関係者の出席のもと、15 研究課題の成果発表と活発な討論を行った。

## 3. 研究成果発表

### (1) 学術誌発表論文

#### 英文論文

1. Hatachi G., Tsuchiya T., Miyazaki T., Matsumoto K., Yamasaki N., Okita N., Nagashima A., Higami Y., Nagayasu T. Poly(ADP-ribose) Polymerase Inhibitor (PJ34) Reduces Pulmonary Ischemia-Reperfusion Injury in Rats. *Transplantation*, 2014, in press.
2. Okita N. (Corresponding author), Ishikawa N., Oku M., Nagai W., Suzuki Y., Mizunoe Y., Matsushima S., Mikami K., Okado H., Sasaki T., Higami Y. Inhibitory effect of p53 in mitochondrial content and function during adipogenesis. *Biochemical and Biophysical Research Communications*, 446, 91-97, 2014.
3. Sasaki T., Seino Y., Fukatsu A., Sakai S., Samukawa Y. Safety, pharmacokinetics, and pharmacodynamics of single and multiple luseogliflozin dosing in healthy Japanese males: a randomized, single-blind, placebo-controlled trial. *Advances in Therapy* 31: 345-61, 2014.
4. Miyahara, K., Nouse, K., Morimoto, Y., Takeuchi, Y., Hagihara, H., Kuwaki, K., Onishi, H., Ikeda, F., Miyake, Y., Nakamura, S., Shiraha, H., Takaki, A., Honda, M., Kaneko, S., Sato, T., Sato, S., Obi, S., Iwadou, S., Kobayashi, Y., Takaguchi, K., Kariyama, K., Takuma, Y., Takabatake, H. and Yamamoto, K. for the Okayama Liver Cancer Group. Pro-angiogenic cytokines for prediction of outcomes in patients with advanced hepatocellular carcinoma. *British Journal of Cancer* 109: 2072-2078, 2013.
5. Yamada A., Watabe H., Iwama T., Obi S., Omata M., Koike K. The prevalence of small intestinal polyps in patients with familial adenomatous polyposis: a prospective capsule endoscopy study. *Fam Cancer*. 13:23-28, 2014.
6. Takata A., Otsuka M., Yoshikawa T., Kishikawa T., Hikiba Y., Obi S., Goto T., Kang Y.J., Maeda S., Yoshida H., Omata M., Asahara H., Koike K. MicroRNA-140 acts as a liver tumor suppressor by controlling NF- $\kappa$ B activity by directly targeting DNA methyltransferase 1 (Dnmt1) expression. *Hepatology* 57:162-170, 2013.
7. Torigoe, T., Tomita, Y., Iwase, Y., Aritomi, K., Suehara, Y., Oukubo, T., Sakurai, A.,

- Terakado, A., Takagi, T., Kaneko, K., Saito, T., Yazawa, Y. Pedicle freezing with liquid nitrogen for malignant bone tumour in the radius: a new technique of osteotomy of the ulna. *J Orthop Surg (Hong Kong)*. 20:98-102, 2012.
8. Tomita, Y., Nagahama, Y., Nakajima, M. R., Kusunose, K., Hara, A., Torigoe, T., Noike, K. Reconstruction of malignant bone tumor in Forearm. *J Hand Surg Eur* 38: S97, 2013.
  9. Fujii, T., Saito, M., Hasegawa, T., Iwata, T., Kuramoto, H., Kubushiro, K., Ohmura, M., Ochiai, K., Arai, H., Sakamoto, M., Motoyama, T., Aoki, D. Performance of p16INK4a/Ki-67 immunocytochemistry for identifying CIN2+ in atypical squamous cells of undetermined significance and low-grade squamous intraepithelial lesion specimens: a Japanese Gynecologic Oncology Group study. *International Journal of Clinical Oncology* DOI 10.1007/s10147-014-0688-0, 2014, in press.
  10. Kikuchi, R., Kikuchi, Y., Tsuda, H., Maekawa, H., Kozaki, KI., Imoto, I., Tamai, S., Shiotani, A., Iwaya, K., Sakamoto, M., Sekiya, T. and Matsubara O. The expression and clinical significance of connective tissue growth factor in advanced head and neck squamous cell cancer. *Human Cell* DOI 10.1007/s13577-014-0092-0, 2014, in press.
  11. Mikami, M., Aoki, Y., Sakamoto, M., Shimada, M., Takeshima, N., Fujiwara, H., Matsumoto, T., Kita, T. and Takizawa, K. Disease Committee of Uterine Cervical and Vulvar Cancer, Japanese Gynecologic Oncology Group. Current surgical principle for uterine cervical cancer of stages Ia2, Ib1, and IIa1 in Japan: a survey of the Japanese Gynecologic Oncology Group. *International Journal of Gynecological Cancer* 23: 1655-1660, 2013.
  12. Ideo, H., Hoshi, I., Yamashita, K. and Sakamoto, M. Phosphorylation and externalization of galectin-4 is controlled by Src family kinases. *Glycobiology*, 23: 1452-1462, 2013.
  13. Kawate, T., Iwaya, K., Kikuchi, R., Kaise, H., Oda, M., Sato, E., Hiroi, S., Matsubara, O. and Kohno, N. DJ-1 protein expression as a predictor of pathological complete remission after neoadjuvant chemotherapy in breast cancer patients. *Breast Cancer Research and Treatment*, 139: 51-59, 2013.

#### 和文論文

1. 須藤結香、沖田直之、樋上賀一. カロリー制限による抗老化・寿命延伸効果のメカニズム～脂肪組織のリモデリングと脂質代謝の活性化～. *自律神経*, 50: 192-195, 2013.
2. 土屋拓郎、沖田直之、須藤結香、樋上賀一. カロリー制限が白色脂肪組織における脂肪酸合成に及ぼす影響の経時的解析. *基礎老化研究*, 37: 29-31, 2013.
3. 大城雅也、関谷剛男. 深部静脈血栓症慢性期後遺症の浮腫に対し、直接的レニン阻害薬アリスキレンが有用であった2例. *日本臨床内科医会誌* 28: 132-134, 2013.
4. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保. 進行肝細胞がんに対するソラフェニブの初期投与量・安全性と有効性の検討. (第8回日本肝癌分子標的治療研究会 優秀演題論文集) *The Liver Cancer Journal* 5: 284-285, 2013.
5. 川本潤、三浦世樹、深田忠臣、林達也. 胆嚢摘出術後腹部ドレーン出血を契機に診断された先天性血友病Bの1例. *日本消化器外科学会雑誌(0386-9768)* 46: 662-668, 2013
6. 三宅清彦、嘉屋隆介、茂木真、田中忠夫、坂本優、岡本愛光. 子宮体がん術後に発症した原発性腹膜がんの一例. *日本婦人科腫瘍学会誌* 31, 1055-1061, 2013
7. 坂本優、嘉屋隆介、三宅清彦、小屋松安子、落合和徳、田中忠夫、岡本愛光. 子宮頸がん 5) 手術療法 b) PDT (光線力学療法). 特集:プロメテウス 婦人科がん最

新医療. 産婦人科の実際 vol 62, 2013.

8. 坂本優、嘉屋隆介、三宅清彦、茂木真、田中忠夫、岡本愛光. 婦人科領域ガイドラインとレーザー医療. 特集: 光による診断と治療. 光アライアンス vol 24, No.3: 12-15, 2013.
9. 坂本優、田中忠夫. 患者さんによくわかる薬の説明 2013年版. メディックイックブック (金原出版) p943-944, 2013.

#### 国際学会

1. Sato, S., T. Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M. Obi, S. Percutaneous ultrasound-guided radiofrequency ablation for extrahepatic neoplasms. 3rd Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL) HCC Conference Nov 2013, Cebu, Philippines.
2. Sato, S., et al. The impact of pegylated interferon based therapy after radiofrequency ablation in hepatocellular carcinoma patients with hepatitis C virus. American Association for the Study of Liver Diseases (AASLD) The Liver Meeting, 2013, Boston.
3. Obi, S., Sato, S., Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M. Bland TAE is an effective, safe and simple method of treatment for intermediate stage of HCC. 23th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL), Jun 2013, Singapore.
4. Kawai, T., Sato, S., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M., Obi, S. Assessment of 98 Cases of Gastroesophageal Variceal Bleeding with Advanced Hepatocellular Carcinoma. 23th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL), Jun 2013, Singapore.
5. Sugimoto, T., Sato, S., Kawai, T., Yashima, Y., Kanda, M., Obi, S. Prophylactic Therapy for Esophageal Varices can Prevent the Death of Hematemesis in Patients with Advanced Hepatocellular Carcinoma. 23th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL), Jun 2013, Singapore.
6. Obi, S., Sato, S., Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M. Combination Therapy of Arterial Infusion 5-Fluorouracil and Systemic Interferon-Alpha for TACE Failure of HCC. Asia-Pacific Primary Liver Expert Meeting 2013, Jul 2013, Korea.
7. Kawai, T., Sato, S., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M., Obi, S. Assessment Of 62 Cases Of Gastroesophageal Variceal Bleeding Associated With Portal Vein Invasion Of Hepatocellular Carcinoma. 7th International Liver Cancer Association, Sep 2013, USA.
8. Obi, S., Sato, S., Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M. Bland Tae Is An Effective, Safe And Simple Method Of Treatment For Intermediate Stage of HCC. 7th International Liver Cancer Association, Sep 2013, USA.
9. Obi, S., Sato, S., Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M. Techniques on Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy. 3rd APASL HCC Conference, Nov 2013, Cebu, Philippines.
10. Sato, S., Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M., Obi, S. Percutaneous ultrasound-guided radiofrequency ablation for extrahepatic neoplasms. 3rd APASL HCC Conference, Nov 2013, Cebu, Philippines.
11. Kawai, T., Sato, S., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M., Obi, S. Assessment of 62 cases of gastroesophageal variceal bleeding with portal vein invasion of hepatocellular carcinoma. 3rd APASL HCC Conference, Nov 2013, Cebu, Philippines.
12. Obi, S., Sato, S., Kawai, T., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M. Hepatic Artery Infusion Chemotherapy Substantially Improves the Survival Rate of Advanced

- Hepatocellular Carcinoma. 24th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL), Mer 2014, Australia.
13. Kawai, T., Sato, S., Sugimoto, T., Yashima, Y., Kanda, M., Obi, S. Assessment of 62 cases of gastroesophageal variceal bleeding with portal vein invasion of hepatocellular carcinoma. 24th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver (APASL), Mer 2014, Australia.
  14. Tomita, Y., Nagahama, Y., Nakajima, M. R., Kusunose, K., Hara, A., Torigoe, T., Noike, K. Reconstruction of malignant bone tumor in Forearm. Federation of European Societies for Surgery of the Hand Congress, 2013, Antalya, Turkey.
  15. Sakamoto, M., Kaya, R., Miyake, K., Koyamatsu, Y., Tanaka, T., Okamoto, A. PDT for CIN3 and early stage cervical cancer might be superior therapy for fertility preservation in comparison with conization. Symposium at the 14th International Photodynamic Association, 2013, Seoul, Korea.

#### 国内学会

1. 金井美紀、宮下知子、仲野総一郎、山中健次郎、高崎芳成 「当院における関節リウマチ患者に対する生物学的製剤の使用状況について (第三報)」 第 57 回日本リウマチ学会総会・学術集会、2013 年 4 月、京都.
2. 松平蘭、田村直人、伊藤朋子、渡邊崇、関谷文男、小笠原倫大、山路 健、高崎芳成 「抗 Ro/SS-A 抗体陽性関節リウマチ患者における生物学的製剤の継続率についての検討」 第 57 回日本リウマチ学会総会・学術集会、2013 年 4 月、京都.
3. 鈴木智 「Tocilizumab 投与患者における関節リウマチ治療効果予測因子の同定」 第 28 回日本臨床リウマチ学会、2013 年 12 月、幕張.
4. 大城雅也 「男と女の心電図」 第 27 回日本臨床内科医会、2013 年 10 月、神戸.
5. 八島陽子、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、菅田美保、小尾俊太郎 「膵臓の超音波検査における Acoustic Structure Quantification (ASQ)法の有用性の検討」 日本超音波医学会第 86 回学術集会、奨励賞演題口演、2013 年 5 月、大阪.
6. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「動注化学療法と Sorafenib の使い分けを探る」 第 35 回日本癌局所療法研究会、2013 年 5 月、神戸.
7. 佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎 「肝細胞がんの頭蓋骨、顎骨転移に対する経皮的ラジオ波焼灼療法」 第 35 回日本癌局所療法研究会、2013 年 5 月、神戸.
8. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「進行肝細胞がんに対する Sorafenib の初期投与量-安全性と有効性の検討-」 第 8 回日本肝がん分子標的治療研究会、2013 年 6 月、金沢.
9. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「肝動注化学療法の生き残る道」 第 38 回リザーバー研究会、2013 年 6 月、香川.
10. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「動注化学療法を極める-IFN+5FU と Low dose FP の使い分けを探る-」 第 49 回日本肝癌研究会、2013 年 7 月、東京.
11. 佐藤新平、山田章盛、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、小尾俊太郎 「心臓直下の病変に対する ”陽圧換気” 無痛ラジオ波焼灼療法の実際」 第 49 回日本肝癌研究会、2013 年 7 月、東京.
12. 杉本貴史、佐藤新平、河井敏宏、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎 「進行肝細胞癌症例の予防的 EVL の意義」 第 55 回日本消化器病学会大会、2013 年 10 月、東京.
13. 八島陽子、河井敏宏、杉本貴史、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎 「肝臓のドック超音波検査における Acoustic Structure Quantification (ASQ)法の有用性の検討」 第 55 回日本消化器病学会大会ポスター発表 (JDDW2013)、2013 年 10 月、東京.

14. 佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎 「Sorafenib Failure に対する IFN 併用 5FU 動注療法の成績」 第 17 回日本肝臓学会大会、2013 年 10 月、東京.
15. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「動注化学療法の標準化に向けて」. 第 55 回日本消化器病学会大会、2013 年 10 月、東京.
16. 小尾俊太郎、佐藤新平、河井敏宏、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「門脈腫瘍栓へのソラフェニブ開始時期」 第 9 回日本肝癌分子標的治療研究会、2014 年 1 月、東京.
17. 川本潤、代市拓也、千田貴志 「開腹歴を有する腹腔鏡下部消化管手術の検討」 第 26 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、日本内視鏡外科学会雑誌(1344-6703) 18: 708, 2013.
18. 川本潤、代市拓也、千田貴志、安田文子 「当科における下部消化管術後 SSI の検討」 第 26 回日本外科感染症学会総会、神戸、日本外科感染症学会雑誌(1349-5755) 10: 684, 2013.
19. 川本潤、安田文子、木村沙織 「下部消化管術後 SSI におけるリスク因子と予防策の検討」 第 29 回日本環境感染学会総会、東京、日本環境感染学会誌(1882-532X) 29(Suppl): 331, 2013.
20. 川本潤、代市拓也、千田貴志 「胆嚢内遊離ガス像を契機に診断し得た十二指腸潰瘍胆嚢穿通の 1 例」 第 75 回日本臨床外科学会総会、名古屋、日本臨床外科学会雑誌 (1345-2843) 74(Suppl): 798, 2013.
21. 川本潤、代市拓也、林達也、千田貴志 「診断に苦慮した急性胆管胆嚢炎併発孤立性微小肝膿瘍の 1 例」 第 49 回日本胆道学会総会、千葉、胆道(0914-0077) 27: 638, 2013.
22. 川本潤、三浦世樹、深田忠臣、林達也、安田文子 「下部消化管術後 SSI 予防策の検討」 第 38 回日本外科系連合学会総会、東京、日本外科系連合学会誌(0385-7883) 38: 649, 2013.
23. 川本潤、鈴木謙介、代市拓也、千田貴志 「胃がん術後に発症した肝原発腺扁平上皮がんの 1 切除例」 第 49 回肝癌症例検討会、2013 年、東京.
24. 代市拓也、川本潤、千田貴志、杉本貴史 「同時性多発大腸がんに対して腹腔鏡下手術を施行した一例」 第 26 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、日本内視鏡外科学会雑誌 (1344-6703) 18: 709, 2013.
25. 代市拓也、川本潤、千田貴志 「強皮症に合併した盲腸がんの一例」 第 75 回日本臨床外科学会総会、名古屋、日本臨床外科学会雑誌(1345-2843) 74(Suppl): 823, 2013.
26. 千田貴志、川本潤、代市拓也 「術前後腹膜腫瘍が疑われた卵巣奇形腫に対し、腹腔鏡下切除し得た 1 例」 第 26 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、日本内視鏡外科学会雑誌(1344-6703) 18: 691, 2013.
27. 千田貴志、川本潤、代市拓也、宮崎勝 「完全内臓逆位を伴う多発胆嚢ポリープに対して腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した 1 例」 第 49 回日本胆道学会総会、千葉、胆道 (0914-0077) 27: 594, 2013.
28. 鈴木謙介、川本潤、代市拓也、千田貴志 「胃がん同時性肝転移切除後 5 年に診断された肝内胆管がんの 1 切除例」 第 1270 回千葉医学会例会臓器制御外科学教室談話会、2013 年、千葉.
29. 長濱靖、富田善雅、楠瀬浩一 「側正中切開による爪下グロムス腫瘍の治療経験」 第 27 回東日本手外科研究会(学会組織委員として主催)、2013 年、東京
30. 富田善雅、ミユラー中嶋理子、長濱靖、楠瀬浩一、有富健太郎 「関節リウマチに対する人工指関節置換術の治療成績」 第 27 回東日本手外科研究会(学会組織委員として主催)、2013、東京
31. 富田善雅、長濱靖、楠瀬浩一、有富健太郎、野池勝利 「Fragment specific classification に沿った Intrafocal intramedullary pinning による掌側ロッキングプレート法の治療成績」 第 56 回日本手外科学会、2013、神戸

32. 富田善雅、長濱靖、ミユラー中嶋理子 「当院における橈骨遠位端骨折に対する治療戦略」 順天堂手外科研究会、2013 年、東京
33. 坂本優、嘉屋隆介、三宅清彦、小屋松安子、茂木真、室谷哲弥、落合和徳、田中忠夫、岡本愛光 「婦人科領域における PDT の適応拡大に向けて」 第 23 回日本光線力学学会学術集会シンポジウム、2013 年、旭川.
34. 菊池良子 「アレイ CGH 法を用いたリンパ節転移陰性乳がんにおけるゲノムコピー数変化の検出とその臨床応用に向けて」 第 23 回日本サイトメトリー学会学術集会、2013 年、東京.
35. 坂本優、嘉屋隆介、三宅清彦、小屋松安子、茂木真、大浦訓章、落合和徳、田中忠夫、岡本愛光 「広汎子宮頸部摘出術の適応と婦人科学的ならびに産科学的予後について」 第 54 回日本婦人科腫瘍学会、2013 年、東京.
36. 菊池良子 「新規卵巣がん抑制遺伝子候補 CTGF(Connective Tissue Growth Factor) および ANGPTL2(Angiopoietin-Like Protein 2)の同定について」 第 31 回日本ヒト細胞学会学術集会、2013 年、埼玉.
37. 坂本優、嘉屋隆介、三宅清彦、小屋松安子、茂木真、室谷哲弥、落合和徳、田中忠夫、岡本愛光 「シンポジウム「管腔臓器の治療における適応拡大と普及を目指して」 婦人科領域における PDT の適応拡大に向けて」 第 34 回日本レーザー医学会、2013 年、東京.

#### 研究会、講演

1. 佐藤新平 「肝がんに対するラジオ波焼灼療法」 大塚製薬株式会社社内勉強会、2013 年 6 月、東京.
2. 佐藤新平 「肝臓領域における疾患と治療」 エーザイ株式会社 MR 研修会、2013 年 8 月、東京.
3. 佐藤新平 「肝がんを”ラジオ波”で挑む」 第 573 回デンタルセミナー例会、2014 年 1 月、東京.
4. 佐藤新平 「肝外転移に対する RFA」 第 33 回東京肝癌局所治療研究会、2014 年 2 月、東京.
5. 川本潤 「外科領域手術と術後感染およびがん再発との因果関係に関する検討」 第 585 回東京デンタルセミナー招聘講演、2014 年、東京.

#### 総説

1. 関谷剛男 「がんは DNA の病気 (3)」 Fluid Power, 27, 84-88, 2013.
2. 関谷剛男 「がんは DNA の病気 (4)」 Fluid Power, 27, 65-70, 2013.
3. 山中健次郎 「1.総論、3.リウマチ性疾患診療の基本：診療のポイント、B.関節症状」 リウマチ・膠原病内科 診療マニュアル、高崎芳成、安部千之、田村直人編、41-50、日本医学館、2013.
4. 金井美紀 「5. 血管炎、2. 結節性多発動脈炎」 リウマチ・膠原病内科 診療マニュアル、高崎芳成、安部千之、田村直人編、211-215、日本医学館、2013.
5. 松平蘭 「2. 骨・関節疾患と関連病態、3. 若年性特発性関節炎」 リウマチ・膠原病内科 診療マニュアル、高崎芳成、安部千之、田村直人編、115-119、日本医学館、2013.
6. 松平蘭 「8. リウマチ性疾患の治療、4.生物学的製剤」 リウマチ・膠原病内科診療マニュアル、高崎芳成、安部千之、田村直人編、357-366、日本医学館、2013.
7. 小尾俊太郎、佐藤新平 「インターフェロン併用 5-FU 動注化学療法」 肝疾患の基本手技 第 2 章 2) 3) 119-131、2013.

### Ⅲ. 附属杏雲堂病院

#### 1. 事業概況

##### (1) 職員

期末時点の常勤職員数は、医師 22 名、看護師 148 名、放射線技師等医療従事者 62 名、事務職員 17 名であり、その他に非常勤職員、派遣職員等が各業務に従事している。

##### (2) 概況

当院は、明治 15 年 6 月 1 日開院以来医学の進歩に寄与し、医療をもって社会に貢献するという理念の下、臨床と研究を両立してきた。平成 24 年 4 月 1 日より公益財団法人佐々木研究所として認定され、臨床と研究の連携をさらに進め確立する必要がある。平成 25 年度は、病院職員から臨床研究の倫理委員会へ申請が 11 件承認され、臨床研究が活発に進められた。また、婦人科、内科・リウマチ科では佐々木研究所での実験を伴う研究も行われた。

#### 2. 事業計画の達成状況

##### (1) 医療の質について

「神田駿河台で 130 余年、地域とともに杏雲堂病院」のキャッチフレーズで地域医療貢献に務めた。その一環として、平成 25 年度も近隣の医師を対象に、当院の現状説明を目的とした懇親会を開催し、多くの医師に御参集いただいた。参加いただいた医師には、当院の連携医となっていていただき、現在 51 名となった。連携医からの患者紹介例は年々増え、平成 25 年度には 292 例となった。

平成 25 年 7 月 1 日より順天堂大学佐藤潔特任教授を総院長に迎え、更に 12 月 13 日には学校法人順天堂と公益財団法人佐々木研究所の間で臨床及び研究の連携協定が締結され、順天堂と杏雲堂病院の関係はより深いものと成った。その結果、今年の順天堂医院から当院への紹介患者数は 156 件（平成 24 年度）から 306 件と増え、紹介元施設では一番多くなり、当院から順天堂医院への紹介も大幅に増加し 142 件となった。この連携により、当院での診療の質の向上も図れた。

また、がん診療においては、「このがんなら杏雲堂病院で」をキャッチフレーズとしているが、1.5 テスラ MRI の導入、多目的 X 線テレビの更新、超音波診断装置 2 台購入、内視鏡システム更新、放射線治療システムの治療計画装置の更新、骨密度測定装置更新を行い、がん診療の充実を図った。これらの機器はがん診療以外の一般診療でも用いられ、検診にも活用してゆく予定である。

##### (2) 医療サービスについて

平成 25 年度に行った外来・入院患者満足度調査の結果は、平成 24 年度と著変なく殆どの項目において 5 点満点中 4 点以上で、概ね良好であった。例年問題となる

外来待ち時間対策として、診察予約と診察室への呼び込み方法を統一し、外来のビデオモニターで医療情報等を放映し患者待ち時間の過ごし方にも配慮したが、やはり前年同様外来待ち時間が最も問題となった。平成 25 年度は 3 階中央カルテ室の跡に外来患者、内視鏡受診患者、手術終了待ち家族の待合室を設置した。また、地下 1 階にも放射線科患者のための待合室を新設した。患者療養環境の整備のため、4 階病棟、5 階病棟、6 階病棟の改装を行い、これで全病棟の改装が終了した。また、患者相談窓口をより充実したものとするため、患者相談室を医療連携室から独立させた。

### (3) 人材育成について

人材の配置においては、現在がんを中心に診療を行なっている肝臓内科、腫瘍内科、婦人科においては平成 26 年度医師増員の予定が立った。また、精神科非常勤医 1 名を新規に雇用し、入院患者のメンタルケアを充実させた。しかしながら、平成 25 年度は、それ以外の内科、整形外科、麻酔科医の獲得には至らなかった。医師の業務効率向上のため医師業務軽減を目的とし、2 名の医師事務作業補助者を導入した。また、薬剤師 1 名、放射線技師 1 名の増員を行った。看護部は 7 : 1 看護を維持し 2 交代制を導入し、そのための人員を確保した。事務部門では、医事課の業務拡大に伴い、企画室を分離新設した。

チーム医療では、感染症コントロールチーム、がん化学療法チーム、褥瘡対策チームに加え栄養サポートチームを新設し、緩和医療チームにおいては非常勤ではあるが精神科医師を加えがん診療の充実を図った。また、研究所附属病院である特殊性を考え、引き続き積極的に臨床研究を行う研究心の豊かな人材の獲得に務めた。院内の研修としては、看護師新人研修会、医療安全講習会、感染症対策の講習会を充実したものとした。さらに、新たに毎月全職種参加型ケースカンファレンスを行い、医療情報の共有を図った。

### (4) 財務について

平成 25 年度決算では、入院患者の病棟稼働率 56.7% (前年比 0.7%減少)、入院診療収益 1,907 百万円 (前年比 73 百万円減少) となり、また、外来の患者数 66,084 人 (前年比 1,511 人減少)、外来診療収益は 869 百万円 (前年比 6 百万円減少) となった。平成 25 年度は、病棟等の改修 (3 階~6 階、9 階)、頭頸部廃止等の影響があったにもかかわらず、平成 25 年 12 月以降順天堂との連携が奏功し、平成 24 年度比若干の減少はあったもののほぼ同水準を維持した。他方、当院の地理的特徴を生かし、検診事業において積極的な広報活動を行った結果、13 社、約 900 名の新規検診者を獲得でき、年間合計でも平成 24 年度比検診者 356 人増加した。競争力ある医療レベルを確保するため、「ムリ・ムダ」を省きつつ、縮小均衡とならぬよう積極的に医療機器の更新及び新規機器の導入を行ったが、各々につきポジティブなキャッシュフローになるよう検討した。

### (5) 新規取り組みについて



当院は平成 16 年 7 月病院機能評価を受け認定された。その後、更新審査を受けなかったため現在では認定されていない。病院機能評価の認定を受けることは病院整備のため有用であり、対外的に信用を得ることも出来るため認定取得を目指す。平成 25 年度は病院機能評価の申請を行い、その準備を進めた。

#### (6) 今後対処すべき課題について

今後対処すべき課題として、病院機能評価以外に、オーダーリングシステム・電子カルテ等のシステム更改プロジェクト、DPC 対応プロジェクト、SPD 導入プロジェクトおよび 1 次救急の開始が喫緊の課題となっている。各プロジェクト間で優先順位をつけながら対応するとともに、年度内にはいくつかのプロジェクトについて目途をつけていきたい。さらに、診療報酬改定等の全体像が明確化になり病院を巡る環境が大きく変化していることから、病院経営のあるべき方向性について再度明確にしていく必要がある。

## IV. 附属湘南健診センター

### 1. 事業概況

#### (1) 職員

期末時点の常勤職員数は 15 名、非常勤職員等 40 名が各業務に従事している。

#### (2) 概況

施設創立 20 周年及び現施設への移転から 8 年目を迎えた平成 25 年度は、経常収益 307 百万円、受診者総数 13,251 名（平成 24 年度比 1.34%増加）と過去最高を達成することができた。これまでの健診事業に対する取り組みが着実に評価されつつあることを実感できる年度であった。

受診コース別では人間ドック、定期健診、婦人科健診は受診者増と好調だったが、成人病健診及びマンモグラフィ検査数は平成 24 年度を若干下回った。また、外来診察は平成 24 年度比倍増以上の成績を上げたが、これはピロリ菌の除菌治療を積極的に行った結果である。

### 2. 事業計画の達成状況

#### (1) 医療の質の向上について

内視鏡検査については、平成 25 年 3 月に最新鋭機種導入により高品質、高機能の健診を提供することができ過去最高の受診者となった。平成 25 年度の内視鏡検査は、検査総数 1,260 例（平成 24 年度比 154 例増、同 13.9%増）と増加した。そのうち、経鼻内視鏡施行例は 1,049 例（平成 24 年度比 146 例増、同 16.2%増）で全体の 83.3%に達し、施行数は初めて 1,000 例を超えた。

受診者のニーズに応じて新たなオプション検査を提供した。血中アミノインデックスがん検査、HPV 検査、及びアレルギー（33 種類）検査が好調であった。また平成 25 年 4 月から、ヘモグロビン A1c の NGSP 国際基準への切り替え、及び子宮頸がん検査のベセスタでの表示併記により標準化を実施した。

(2) 医療サービスの向上について

医療機関との連携関係は、杏雲堂病院を精査判定者の紹介先と位置付けた。平塚共済病院、平塚市民病院及び他の近隣医療機関との関係も引き続き円滑であり、紹介先としての関係を向上し、受診者への医療サービスの向上に努めた。

また、受診者満足度調査を引き続き実施し、問題点の改善を図った。さらに、情報化による迅速で質の高いサービス提供を目指して、IT 機器の更新、配布により健診業務の効率化を実現した。

(3) 人材育成（後継者採用・育成）について

4 月に臨床検査技師 1 名及び 10 月に看護師 1 名の正職員 2 名を採用し、体制強化を図った。職員の技能向上、自己啓発を高める為に外部研修機関主催の「検査実技講習会」、「精度管理研修会」、「超音波技能研修会」、「認定更新研修会」、等に積極的に参加をして、知識、技能の向上に努めた。反面、人件費の増加による支出が増加したが、内部体制の強化のため必要な方策と考えている。

(4) 健全な財務状況（収入増、コスト節約）について

消耗品のコスト削減など引き続き努力した。また予約時にオプション検査の紹介、健診案内送付時に紹介パンフレットの同封、健保、代行機関への訪問時にはオプション検査の紹介、等の活動をして収入増を図った。

(5) 成長性（新規取組み、患者・健診者数の増）について

健診枠拡大、受診者数増を目指して、毎週水曜日の午後婦人科健診を実施し、平塚市、大磯町、二宮町の住民健診を実施した。

(6) その他

研究面では、「無症候性胆石症例の長期追跡調査」を今後も継続し、平成 26 年度より松原前センター長を研究顧問として新たな研究課題に取り組み、研究姿勢を更に重視する方針を採っていく。

なお、健診フロアの椅子を全脚入れ替え、寛いで受診いただけるようにした。

また、7 月 1 日にて創立 20 周年を迎えて「湘南健診センター二十年のあゆみ」(小冊子)を発行した。7 月 11 日に創立以来ご尽力を戴いた関係者、OB、職員の方々 47 名の皆様に出席いただき懇親会を実施した。

### 3. 対処すべき事項

- (1) 内視鏡検査については、受診者のご要望に沿って受診日、人数枠の増を検討する。
- (2) オプション検査は、受診の要望を踏まえて随時追加する。

- (3) 懸案である婦人科健診の将来展望は、新たな婦人科医の就任により目途が付き、引き続き今後も体制強化、危機管理対応を図る。
- (4) 特定健診枠の設定、スポーツ、リラクゼーション等の事業連携を通して、継続的な事業発展を目指す。

## V. 収益事業

### 1. 職員

事務局長、兼務不動産課長 1 名、嘱託 1 名

### 2. 事業計画達成状況

収益事業は、杏雲ビル賃貸事業及び駐車場事業である。御茶ノ水不動産マーケットでは、大型オフィスビル 2 棟の開業があり既存ビルへの影響が懸念されたが、一部のビルではテナント移転もあったものの、杏雲ビルへの影響は無かった。ただし、杏雲ビルでは大口テナントの新本社ビル完成による退出があり、入居率の維持が厳しい状況であった。

平成 25 年度の実績は、新規テナントの導入及び既存テナントの増床に努めた結果、立地条件を含めた利便性及び共用部リニューアルが評価され、入居率は平成 24 年度末の 96.6%から平成 25 年度末の 93.0%（いずれも契約締結ベース）と若干の減少に留めることができた。収支予算と比較すると収入及び利益共に上回ることもできた。平成 24 年度との対比では、テナント入れ替わりに伴う空室期間が生じたため経常収益が減少となったが、管理コストの低減等により正味財産増減額は若干の減少に抑えることができた。

また、設備投資として空調機器の中央監視盤を更新した他、5 フロアーの共用部改修を行った。平成 26 年度には全フロアーの改修が完了する予定である。

駐車場事業については、杏雲ビル地下駐車場の稼働率アップがあり、若干の収益増加となった。

## VI. 財団事務局

### 1. 財団事務局の活動について

#### (1) 職員

事務局長、次長（兼務課長）1 名、事務職員 4 名、嘱託 1 名。

#### (2) 平成 25 年度事業計画達成状況

##### ① 将来ビジョンの具体化及び共有化

公益財団法人の目的である研究機関としてのあるべき姿を目指し、平成 25 年 7 月に将来構想検討委員会（委員 7 名）を発足した。7 回の委員会開催を経て、今後 4 年間の法人全体及び各事業所の将来ビジョン、収支計画、投資計画、及び資金計画を策定し、平成 25 年 12 月開催の理事会に付議し、平成 26 年 2 月開催の臨時評議員会にて報告した。学校法人順天堂との研究・医療連携を軸とし、研究所においては「がんとの共存を目指す研究」を推進し、杏雲堂病院においては上記医療連携を中心に急性期病院の維持・推進により平成 29 年度には収支均衡を目指し、湘南健診センターにおいては人的及び施設面の拡充を図り、収益事業においては利益を確保するための諸施策を立案した。今後は将来構想計画に掲げた諸施策の実施徹底を図っていききたい。

## ② 制度面の見直し

人事制度に関し、従来実施したが継続できていなかった目標管理制度（目標達成度評価システム）を再度導入するための準備を行った。従来の課題を克服するため、よりシンプルで使い易い制度に再設計し、また、評価者訓練及び管理職の評価体制を確立し、平成 26 年度において導入をする予定である。

また、学会参加規程の改定、組織変更等に伴う就業規則の改定、定年再雇用制度の改定を実施した。

## ③ 財務基盤の強化

杏雲堂病院の経営基盤を固めるため、予算を追加し病院内のリノベーション及び医療機器の購入・更新を図り患者増加を目指した。平成 26 年度にその効果を摘み取っていききたい。業務改善提案について平成 25 年度は未実施であったが、平成 26 年度に計画している。また、収益事業については、杏雲ビルの空室部分を先ず埋める方針をとり、予算を上回る収益をあげることができた。

公益財団法人移行を機に固定資産税の非課税申請を行い、認められた。今後、公益事業資産の固定資産税は非課税扱いとなり、また、過年度納付分の還付を受けた。また、平成 25 年度には多大のご篤志を頂いた。合計 244,869 千円のご寄付を受け、研究用・医療用の設備・機器等に活用している。

## (3) 対処すべき課題

### ① 学校法人順天堂との研究・医療連携の促進について

動物実験施設の再開と併せ、上記連携を活性化しその実を早期に上げていくことが重要である。

### ② 人事制度の改定

目標達成度評価システムの再実施し、その定着化を図ること、及び給与体系について見直しを図ることが課題である。

### ③ BCP 対策

大規模災害対策の計画を練ってきているが、備蓄品等の購入整備を行うと共に、

災害発生以降の2次対応を計ることが課題である。

## 2. 評議員会・理事会に関する事項

### (1) 平成25年6月6日 第1回定例理事会開催

#### ① 決議事項

- ・平成24年度事業報告・財務諸表の承認、財産目録の承認、研究機器寄付の承認、会計監査人報酬の承認、理事会開催日程、定時評議員会の招集、臨時理事会の召集の承認

#### ② 報告事項

- ・業務執行状況、経営会議報告他

### (2) 平成25年6月20日 定時評議員会開催

#### ① 決議事項

- ・平成24年度事業報告・財務諸表の承認、財産目録の承認

#### ② 報告事項

- ・院長人事他

### (3) 平成25年6月20日 臨時理事会開催

#### ① 決議事項

- ・総院長職の創設及び職制・分掌規則改定の承認、就業規則の改定及び人事案件の承認

### (4) 平成25年9月19日 第2回定例理事会開催

#### ① 決議事項

- ・会計監査人の監査報酬の承認、就業規則改定の承認、病床数削減及び病棟改修工事の承認、医療機器購入計画の承認

#### ② 報告事項

- ・業務執行状況、経営会議報告、固定資産実査進捗状況報告他

### (5) 平成25年11月20日 臨時理事会開催

#### ① 決議事項

- ・学校法人順天堂との連携協定書の承認

#### ② 報告事項

- ・杏雲堂病院創立記念日講演会・がん講演会開催報告

### (6) 平成25年12月19日 第3回定例理事会開催

#### ① 決議事項

- ・就業規則改定の承認、看護部長任命の承認、臨時評議員会召集の承認、将来構想案の承認

#### ② 報告事項

- ・学校法人順天堂との連携協定書調印、業務執行状況、動物実験施設整備委員会規程、固定資産実査進捗状況報告他

(7) 平成 26 年 2 月 5 日 臨時評議員会開催

① 報告事項

- ・学校法人順天堂との連携協定書締結、将来構想検討委員会報告他

(8) 平成 26 年 3 月 13 日 第 4 回定例理事会開催

① 決議事項

- ・平成 26 年度事業計画・収支予算の承認、平成 26 年度資金調達及び設備投資の見込みの承認、評議員会召集の承認、平成 26 年度役員会日程の承認、平成 26 年度役員等報酬総額の承認、平成 26 年度銀行借入の承認、理事の職務権限規程改定の承認、職制・分掌規則改定の承認、顧問採用・処遇に関する規定の承認、人事案件、就業規則の改定の承認、リニアック及び CT(80 列)の取得承認

② 報告事項

- ・業務執行状況他

(9) 平成 26 年 3 月 20 日 評議員会開催

① 決議事項

- ・平成 26 年度事業計画・収支予算の承認、平成 25 年度資金調達及び設備投資の見込みの承認、役員等の選任

② 報告事項

- ・役員会日程他

3. 各種届出に関する事項

(1) 事業報告等の届け出

平成 25 年 6 月 27 日付けで、平成 24 年度の事業報告書、貸借対照表及び附属書類を、内閣府に対し電子申請により届けた。

(2) 事業計画等の届け出

平成 26 年 3 月 31 日付けで、平成 26 年度の事業計画書、収支予算書及び附属書類を、内閣府に対し電子申請により届けた。

平成 25 年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第 34 条第 3 項に規定する「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので、附属明細書を作成していない。